

宗教と科学

今 岡 進

宗教と科学に関する著名な出来事として、16世紀に起こった天動説から地動説への転換がある。地動説を最初に唱えたコペルニクスはカトリック教会の司祭であったが、その後この説を実験的に証明したガリレオは、宗教と科学の狭間で揺れ動いた。これは、宗教が政治と密接な関係を持っていたことにも由来するが、当時としては「コペルニクスの転回」という言葉が現在でも使われるぐらい大きな変革であった。私が専門とする生化学の分野では、19世紀初頭に、それまで生命体内でしか作れないとされた尿素をヴェーラーが人工的に合成した事が大きな変革に繋がっている。現在では、細胞の中で起こっている反応はすべて化学反応であり、それぞれの反応は試験管の中で人工的に起こすことができる。しかし、現在まだ細胞（或いは生命体）自身は人間の手で作りに出すことはできない。生命体において、細胞中での化学反応が合理的かつ緻密に組み合わせられてきている事実を目の当たりにすると、そこに神の業を感じずにはおれない。

未知のものに対する畏敬の念から生まれるのが宗教であり、それを説き明かすのが科学であると思う。例えば宗教で言う「隣人愛」は、生化学的に言えば人間の違いはたかだか数百個に1個の塩基の違いであるが、それはまた多くの多様性を生む原因であり、お互いの多様性を認め合うことであると言える。一方、科学そのものは真理の探究であり、そこに宗教観や倫理観はない。しかし、その研究の進め方や得られた新しい知見や技術の利用は宗教観や倫理観のもとに行われなければならない。例えば、生き物を使用する実験では、無駄に命を奪ったり苦痛をできるだけ与えないような実験をしなければならない。また、核物理学の知識は、一方では原子力発電のようにエコなエネルギーともなるが核兵器ともなるし、バイオテクノロジーの知識はワクチン開発、一方では細菌兵器ともなりうる。本来宗教は「諸行無常」すなわち生命が誕生して消えていく中で人がいかに生命を尊重し、さらにどのように生きていくかについて導くものである。しかし、最近の科学では生命のみならず、この地球さらには宇宙全体が生まれ、そして消えていく運命にあることが明らかになっている。宗教は、生命のみならず例えば地球環境などのもっと大きな生き物に対しても、将来を導く必要があるのかもしれない。最後に、宗教と科学は相対するものではなく、時代と共に一緒に発展していく必要があると考えている。

(理工学部教授・学部長)